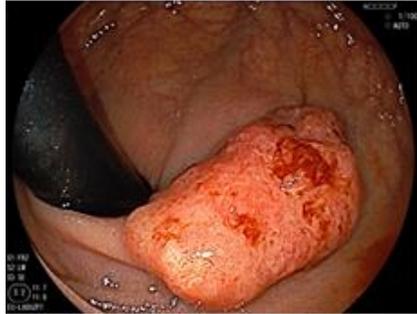


大腸がん

大腸がんは、日本で1年間に約158,000人が診断されます。男性にやや多い傾向にあり、30代前半から増加して、高齢になるほど多くなります。男性では胃がん、前立腺がんに次いで3番目、女性では乳がんに次いで2番目に多いがんです。

今回は、大腸がんについて解説します。

進行大腸がん（直腸がん）



進行大腸癌



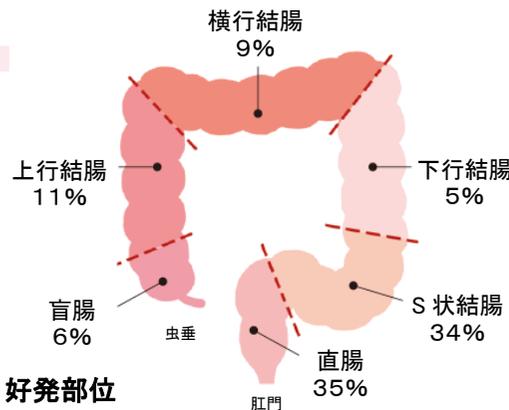
原因

大腸がんの発生には生活習慣、特に食生活との関わりが深いと考えられています。牛や豚、羊といった赤身の肉、ハムやソーセージなどの加工肉をよく食べる習慣や、低繊維・高脂肪の食事、過度な飲酒、喫煙は発症のリスクを高めるとされます。さらに遺伝的要因もあるようです。また、遺伝性の家族性腺腫性ポリポシスという疾患は、治療せず放置するとほぼ100%がん化します。

好発部位

大腸がんには、良性のポリープが大きくなる過程でがん化して発生するものと、粘膜の正常な細胞が直接がん細胞に変化して発生するものと2つのパターンがあります。また、日本人では70%がS状結腸と直腸に発生することが知られています。(図1)

(図1) 好発部位



症状

摂取した水分の80%は小腸で吸収され、残りの20%が大腸で吸収されます。

大腸のはじめの方の盲腸や上行結腸、横行結腸の半分くらいまでは、まだ水分の吸収が十分でないため、便も泥状です。このため、この部にがんができていても便の通過障害は来しません。このため、この部にできるがんは気づかれにくく、かなり大きくなって、腹部のしこりや出血による貧血で気づかれることが多いです。

下降結腸、S状結腸では便が固まっているので、この部にがんができると、便秘と下痢を返す、独特な通過障害を起こします。これは、がんで腸の内径が狭くなっているため、下痢にならないと便が通過しないからです。

直腸のがんは肛門に近い部位であり、がんからの出血による、血便で発見されることが多いです。また、がんが大きくなり、直腸の内腔が狭くなると、細い便になったり、残便感の症状がでることもあります。

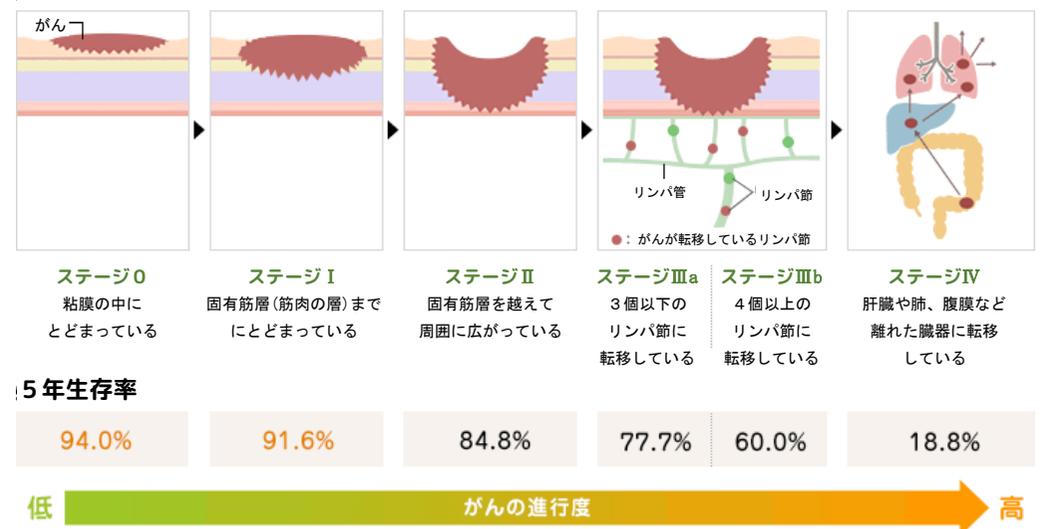
ステージ分類

大腸がんは数年~10年かけて進行していくといわれ、比較的成長が遅いがんです。

がんが腸の粘膜の中にとどまるのがステージ0。粘膜の下の筋層までにとどまるのがステージI。筋層を越えるのがステージII。リンパ節に転移しているのがステージIII。肝臓や肺、腹膜に転移しているのがステージIVとなります。(図2) ステージIから進行がんといわれ、ステージが上がれば、予後は悪くなります。

治療は手術が主体で、肛門に近い直腸がんでは、人工肛門の造設が行われます。大腸がんの早期発見には検便が有効で、便に血液が混じっているかを判定します。40歳以上の方は、岐阜市大腸がん検診で便検査が受けられますので、年に一度は受けてください。

大腸がんのステージ



(図2) 大腸がんのステージと予後